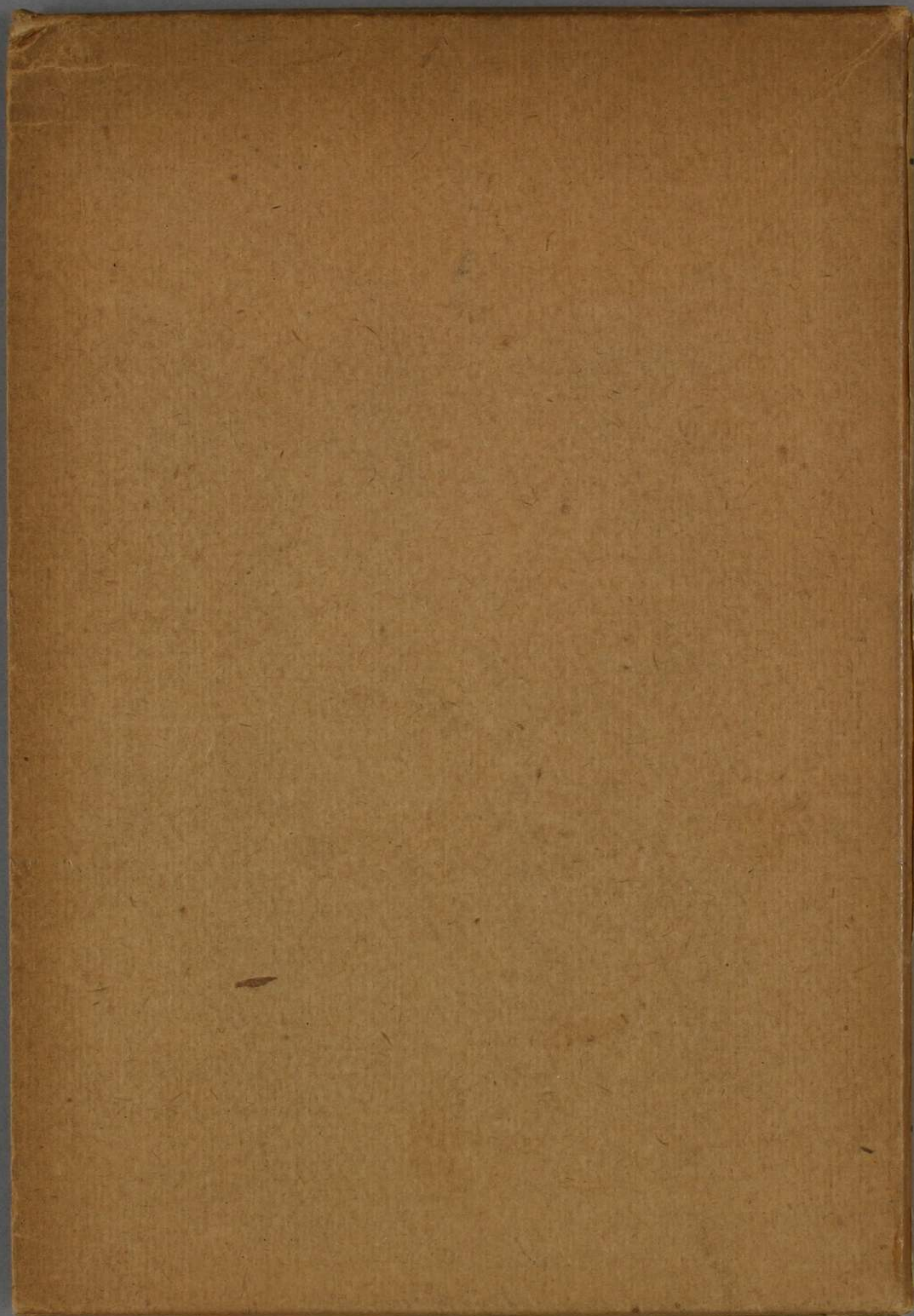
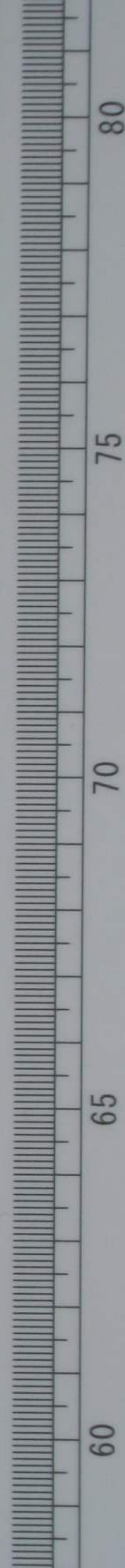
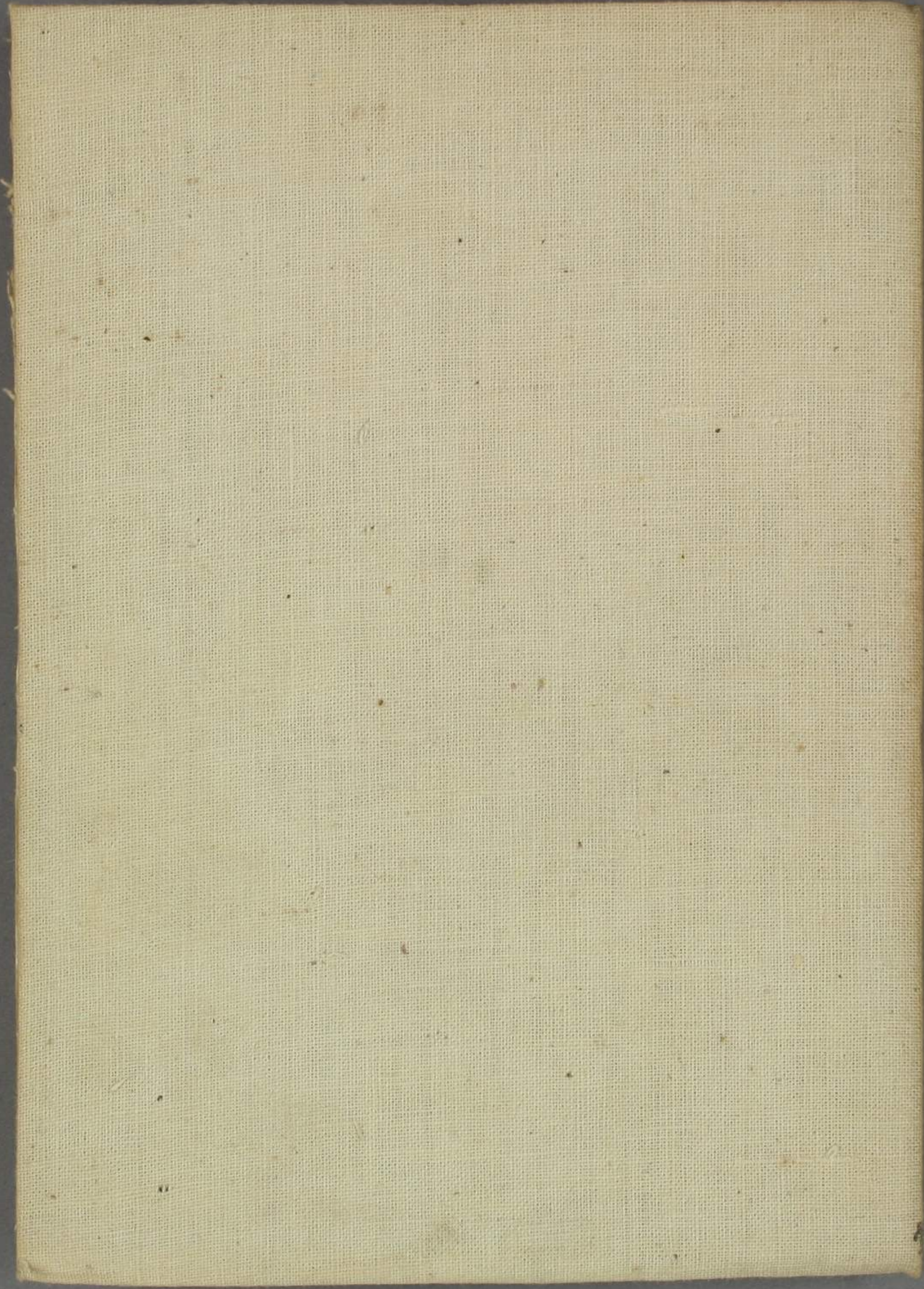


集詩 世界の魂 福田正夫著

版堂歩一





世界の魂

福田正夫詩集

第一卷



回
一
波
中

可
あ

川
世
の
と
る

詩集
世 界 の 魂
福 田 正 夫 著

1921

一 步 堂 版
東 京

詩集
世 界 の 魂
福 田 正 夫 著

1921
一 步 堂 版
東 京

目次

序詩

魂の歌……………三

孤獨の歌

月光哀曲……………三

波の歌……………一〇

なやめる旅人のうた……………一五

黄昏の曲……………二二

暗黒の歌……………二五

哄笑の歌……………三〇

大空の歌……………四二

別れ行くK子に送る詩篇……………四七

靈魂悲調……………五二
 敗れたる者の歌……………五七
 孤獨の歌……………六五
 苦惱の歌……………七三

人間の歌

太陽の歌……………八一
 生の歌……………九〇
 戦鬪曲……………九五
 死と生の曲……………九九
 凍つた路……………一〇一
 人間の歌……………一〇六
 郷土の歌……………一一九
 心の鐘……………一二五
 飢えた子供の泣き聲……………一二九

大地の歌……………一三四

世界の魂

見果てぬ國……………一四三
 心の求める國……………一四七
 自らの求めと鐘の音……………一五一
 解放の國……………一五四
 黎明詩篇……………一五九
 秋の豫言……………一六二
 生誕の國……………一六五
 あらしの詩篇……………一六九
 世界の底に……………一七四
 愛……………一七八
 民衆の國……………一八三
 霧の底に……………一八六

世界の夕	一九一
世界の魂	一九三
脈々とした山	一九九
自然の鍵	二〇四
詩集「世界の魂」の終りに	著者 二〇九

詩集「世界の魂」目次畢

序詩 魂の歌

魂の歌

肉體の太陽、

— 魂。

魂はそれ自ら歌ふ、

世界の、

人間の、

樹の草の土の。

永遠の肉體、

— 魂。

深夜、

めざめてゐる私、
自らの思索の中に、
さみしい人生の、
苦しいいたましい思索の中に、
めざめてゐる私。

其時だ、

心の底に、

遠く世界から、

近く人間それ自らの、

さめたるわが魂の歌が、

悲しくも歡喜を歌ふ。

沈黙の歌、

歌はざる歌、

偉大の、壯重の、肉體それ自らの歌、
永遠の肉體の歌。

きいてるか、

ああ、死の沈黙、

その中に大きく叫ぶ歌を、

深夜、

眠る者は眠り、

わが心は起きてきく、魂の悲しき歌、
しかも歡喜の歌。

立つて、

扉をあげよ、

5
心の扉を、

私は立つて、

しづかに、戸外の星の空を求め、

大地を踏んで、

黙したるわが魂の歌を、

かぎりなくさみしく、地へ空へ。

かぎりなく強くよろこばしく、地へ空へ。

其時、

まあ、何んといふ驚きぞ、

地はかすかに應ずる低きコーラス、

やがて強く心を打つ地の魂の歌、

大地のきこえざる歌、

さびたる土の歌、

愛の歌の、深き底よりわが魂の歌に應ずるを。

踏みしめたる大地、

きくわが心は、大地の魂のさみしきコーラス、

相應じ、相應じ、永遠に。

ああ、

極まりなき感激、

其時しかも、空の星の歌、

無限の宇宙に、

輝きながら、暗の中の歌、

ああ、相應するあらゆる魂の歌。

見よ、

暗の底に、樹も黙して魂の歌、

草の葉すら魂の歌、

あらゆるもの相應じ、相應じ、魂はそれ自ら愛に歌ふ。

ああ、沈黙それ自らの歌。
肉體の永遠よ、

眠りたる人間の魂も、またわが魂と歌ひ合ふ、
あすはまた生活の歌に、
戦ひの歌に。

沈黙の歌か、

静けさきはまりなく、しかも世界の生と愛、

苦しめて生は歌、愛は歌、

あらゆるもの生きて歌ふ、

あらゆるもの愛に歌ふ、

ああ、魂の歌、

きけ、悲痛と歡喜の永遠の愛の歌を。

魂の帆の歌

(魂の歌のあとに)

かぎりなく広い海に、

私は帆を浮べてみたいのです、

生活の海に魂の帆を。

風はやはらかく吹くでせう、

また強く荒くも吹くでせう、

しかし魂の帆は破れないできつと人々をかぎり

ない仰望に導くでせう、

肉體の船を、永遠に。

船はさすらひます、

魂の帆は永遠の船路に、

またさすらひの行手をさします、

そして人生はかぎりない廣い海なのです。

苦しくつて、

かぎりなく苦しくつて、

私は肉體の船に魂の帆をかゝけて走ります。

孤 獨 の 歌

月光哀曲

光りの影、

月――。

光つてる空の、

暗い空の果てからの嵐、

月光の嵐、

生の嵐。

ちつと、

ちつと、

立ち止まつてきけよ、

世界の外から落ちて来る、
世界苦を洗ふ光の嵐の曲。

—

上る、

缺けながら上る、

蝕の月の影、

見よ、六月の空に揺れながら、

大きく舞踊しながら。

曲はこまやかにふるへながら。

しめつた雨の長い間、

いかに頽廢の底から人間は待ち望んだか、

ああ、その月の缺けながらも輝いて、

やはらかに頽廢を洗ふ、

力強く胸をなだめる、

そして、あの深い悲しみの世を洗ふ嵐の曲、

光と影との交響の幾萬里の空を流れながら。

二

光の下に、

森の暗い影、

樹の黒い影、

光の曲に弾き出だされた、

なやみとうれひの影。

森をすかして、

揺れるのはかすかの灯影

暗の底にさめて来る力の自主、

ああ、光と影との曲の底に、

しづかにも力は湧き上る、
力は踏みしめる。

土よ、

大地よ、

月光はいまこの地の底の、
わが寂寥の魂を呼び起して、
遙かに遠く、

果てしない人生の行進曲、

ああ、友よ、

地のうれひは深く、

生の嘆きは長いのだ。

三

月光の下に、

友よ、いま君と我との路は果てしなく、

そはあまりに遠く、

しかも君はこの故郷の宿を離れて、

再び戻らぬ第二の家へ近く行くのだといふ。

諦めを君は語るけど、

ああ、諦めるにはあまりに寂しい人生、

諦め果ててこの砂漠の路に、

獨り立つことの悲しさを考へ見よ、

たとへ二人にても、路上に止まることは無し難いさみしさだ。

所詮、

この人生は苦難の路を、

なやみうれひ悲しみながら、

永遠に暗い路を、

ちつと踏みしめながら行くのだ、
自らの力で迎えるのだ。

四

ああ、

友よ、一杯のコーヒー

一皿のオムレツ、

これが君を送る貧しい心づくしか、

貧しい心の持主は君を送るに、

この貧しさを贈るのだ。

街頭に立つて、

いつまで語つても、

誠はさらに盡きないが、

友よ、別れよう、

月はもうあでやかなまるい影、

恐らくあの影から来る名曲の交響は、いつも君と私の、

心をうつて、

いつこいかなるところまでも、

互に鳴り合ふであらう。

ああ、

月は一つの光、

月光は一つの曲、

遙かなる空から降りそよぐ月光の哀曲を浴みよ、

その頽廢を洗ふ嵐に吹かれよ、

地球の外に懸かる月が、いま人間の衷に生きる、

ああ、月は生きる、

月の悲哀と力は生きる。

波の歌

うめき、

苦しむ、

心の底の波――。

果てしない空の果てから、

高く起つてよせ、

濁つて碎け、

泡だつてよせる。

心の底に泡だつてよせる、

高い波、

濁つた波、

ああ、心の底の世界の波。

世界の狂濤、

人間の狂濤、

巻き起つてよせる暗い濁つた波、

それも碎け、散り引いて行く波。

沖に鷗がとんでる、

沖に波が狂つてる、

心の沖で人間が苦しんでる、

心の沖で世界がうめいてる。

うめきは高まり、

波は高まり、

よせる、胸を破つて——、
 海の底から湧き出でる力、
 空の果てから湧き出でる力、
 果てしない愛に苦しくよせる。

うめきはその大きな手で、
 人間の苦惱をつかみ出さうとする様に、
 長く腕を擴けて来る、
 さうだ、生活の中の苦しみが眞裸に、
 海の彼方から遙によせる。

ぢつとみてるたまへ、
 高くうめいてよせる波、
 豫言者が進む姿だ、
 世界の革命の波濤が、

遠く沖から来る姿だ——。

おお、もう近く、
 世界の思想苦は陸近くへ来た、
 人間の一人一人へ来た、
 一つ碎け、一つ碎け、
 また更に連く世界の狂濤、
 また更に連く人類の狂濤。

よせる波、
 うめく波、
 おお、どんなに苦しい姿だか、
 あらゆる世界の人間がこの姿でたほれた、
 そして永遠に連いて、倒れ、起り、碎けて行く。

狂大なマツスの、
自然の底に起り、
愛の人間に起り、
おお、何といふ狂濤のうめき、
うめきの中の人類の叫び――。

なやめる旅人のうた

さみしい夜の、
ふる雨にぬれしよほれた旅人、
行き暮れた世界の旅人。
人間よ、
いつも旅の姿に。
夜の雨にぬれながら。

遠く暗い空の果てから、
ぬれしよほれた夜の

悲哀の影がふつて来る、
そして寂寥の人間の魂が。

見よ、

街の火が水に揺たて、
かすかにかすかに光る、
ちらちら、ちらちら……おお、なやましい寂光。

空から降つて来るのは、
かの碧空の夕まぐれに、
涙ぐましく仰望した人間の愛が、
いま求められぬさみしさに降つて来たのか。

求められぬ愛、

さみしい苦惱の愛、

世界の旅人のいつも悲しく、
よるべなく求むる愛。

あゝ、

愛はいつも果てしなく空にのほり、
しかも果てしなき住かに止まりかねて、
悲哀の影にふつて来る。

そして暗い空から、

寂光の地上の影、

しかも更に深く地の中に、
暗くさみしく泌み入りながら。

ああ、

しかも二人、

いまわれらはこの夜の底の旅人、
求められぬ愛の雫にぬれながら。

そしてこの旅人の一人の、
求めた悲しい一杯の酒が、
なやましい人間の、
心の扉をうちたゞきながら、
遠く遙に夜の底を走り、
遠く遙に世界の野に――。

見よ、

いまその野の果てを、

人間の影は夜の底に揺れながら、

その揺れたる影の水にうつりて更に揺れながら。

ああ、

心の寂寥、

魂の悲哀、

人間の影の地に揺れて行くは、

この世界の旅人の夜の底の涙。

かくて影は行き、

影は消え、

夜の底の影の、

悲哀と寂寥をうつして燃えながら、

夜は暗い雨の空、

地は寂光の街の果て、

人間は消えて行く空の果て。

ああ、

心を傷らす行けよ、
 あこがれ行く人間の魂の、
 世界の魂にとけて、
 心の底の影の世界の野に消えて、
 いつか眞の人間は虚無の底に、
 永遠の寂光と輝くのだ。

夜は虚無、

求められぬ愛はふる雨の、
 ぬれしよほれた旅人二人、
 なやみながら、
 苦しみながら、
 正しき力を起して行かう、
 正しき意志を起して行かう。
 ああ、

寂寥からの解放よ、
 さみしき夜の空の、
 しかもうれしく虚無の底に、
 心の太陽の影、
 魂の月の影。

ぬれながら行けよ、
 ぬれながら行けよ、
 世界の果てを力強く、
 われらは愛の戦ひの旅人二人、
 ああ、求められぬ愛の旅人二人。

(この詩をわが若き妻に送る)

黄昏の曲

黄昏は空から降つて來るのか、
人間の心に降つて來るのか、
暗い空の果てから、
苦しみの夜は流れて來る。

暗い影は、
心の底に踊り、
世界の虚無の苦惱に、
ちつと悶えながら。
遠くの野に、

人の影一つ消え、
また一つ消え、
遠くの空に、
星一つ殖え、
また一つ殖え、
天と地の寂寥の黄昏。

おゝ、あはたゞしい山の眠り、
うすくうすく力のない瞳の中に、
涙ぐましく沈黙、
夜の愁の沈黙、

其時、
町の中をさみしく人間はかへるだらう、
永遠の労働の終りから、

解放の國を握つて、

世界の人間はかへるだらう、

おゝ、時の流れの行手の、

かぎりない愛の世界に。

野も暮れた、

山も眠つた、

空には月の影が一つ、

孤獨の影が一つ、

まばらにうすき星の群の中に、

あゝ、愛する者よ、

あゝ、世界の人間よ、

この黄昏の中の、

暗い苦惱の路を歩きながら、

月を見、星を見、愛の苦しみを見る。

孤獨の哀感の中に、

苦しみの愛を求めて、

いつ人間は永遠の國にかへり得るだらう、

おゝ、世界の時の流れ、

おゝ、世界の黄昏の曲。

暗黒の歌

影を行く人間、
地の暗い影を行く人間。

人間の生は、

永遠の暗い夜だ、

擴つてる世界の暗黒だ、

ああ、悲哀の暗い影。

擴つてる暗黒、
惱んでる人間、

ああ、永い暗い路を、

かうして行く悲哀の影。

生ひ育つて来た、

慕しい心の故郷から、

生に追はれ生を追つて、

求めて来た光の影。

ああ、

何んといふ慕しい生が、

いつも若い胸に燃えたらう、

何んといふ光の影が、

小さく沖遠く惱んだだらう、

輝かしい希望の忍苦が。

ああ、

まだ幼なかつた頃、

悲しい母の手にすがつて、

その涙がどんなにいとしかつたらう、

そしてその母の嘆きも知らずに。

日は過ぎた、

時は逝いた、

悪童の夢も、

来る日の影に蔽はれて行つた、

空しい推移が、

なやましい時を曇らして來た。

おお、

かの悪童の、

それも辛い人生であつたが、

九つにして父の死、

それから叔父の許に養はれた彼。

年よつた祖母と、

職に放れた叔父の家に、

二人さみしく焼芋に留守をしのいだ幾日、

その祖母ももう長い眠りに、

何時も暗い暗い大地の夢だ。

十一の時から四年、

その間、遊廓の上の丘に建てられた

梅毒病院の暗い書生部屋に、

小さな夢を置いたつけが。

悪童は十四の春に、
 手癖の悪いために追ひ出されて、
 故郷のゆめを踏んだのだ、
 そして母と姉との傍ら、
 宿はそこにみつかったが、
 子守、貧しい生活、
 それもまた、暗い夢の見つづけだ。

だが、

時は来て時は逝き、

凡ては革まった、

悪童は中學校に這入れなかつたが、
 小學校では模範的少年になつた。

しかも、

凡ては革まつたが、

心の中に蝕んでゐる暗い虫か、

その時代から太り出したのだ、

虚無と悲哀と幻影と、

少年の心に孤獨と寂寥とがあつた。

好んで書を読んだ彼の兒が、

暗い悲哀の涙を、

書物の上に落す様になつたのも、

恐らくその時代であつたのだ。

それから鎌倉へ、

また一度は貧乏で貪慾な醫師の養子に、

また更に再び鎌倉へ、

そして怠惰と淫讀と、

幻滅と自由と粗暴とが、
その心の暗い虫の成長になつた。

その間に、

彼の姓も違つた、

母も逝いた、

暗い地の底につめたい死があつて、

その死が叫んだと見た昨夜の夢も、

思へば死後七年の今日、

遠い魂に悩む夢の名残かも知れぬ。

その校を出て五年、

東都に出で東都を去り、

雪に信濃を尋ねた日も幾日か、

彼はその初戀と希望とを棄てた、

暗いゆめが、自由を棄てた、

ああ、忍苦の夢が、

眞實の影を棄てた。

永い間の旅人は、

故郷へその夢を運んで來たが、

冷たい地は旅人にさみしい心であつた、

故郷もまた、暗い旅路の、

果てしない苦惱であつたものを。

苦惱は連く、

暗い夢は連く、

家は破産やぶれやうとした、

それを支へるために、

彼の暗い影は一層濃くなつた、

しかもさうなつても理解されない者。

ああ、

どこに相愛する者があるか、

どこに相知る者があるか、

家で、異端兒、

生で、邪宗の徒、

容れられない地がそのすみかなのだ。

戀すらも、

ああ、戀すらも反き去つたではないか、

たつた一人の、愛する影、

相知らうとする影さへ、

反き去つたではないか。

見ろ、

地は暗い、

世界は暗い、

生はいつもさみしい影ばかり、

さみしい空をながれて行く。

光を見たと言ふか、

ああ寂しい光の底に、

その周圍に、

ずつと擴つてるのは暗だ。

太陽の光さへ宇宙の暗にうかんでる小さな影だ。

ああ、

まして人間の悲哀、

まして人間の暗黒、

孤獨はいつに増していま來るのだ、
幻滅はいつに増していま消えるのだ。

虚無の影、

その暗い暗い影、

拓けば更に深く、

拓けば更に廣く、

恐しい暗黒、

生は暗黒、

巨大な宇宙の暗。

(七年前に實母堀川政子の逝きし大正七年五月十七日の夜)

哄笑の歌

今宵、

空は曇つて、

月は見えぬ、

ああ、心の暗い夜。

いまにも、

暗い空から雨が降つて來よう、

さめざめと心の底に、

わが嘆きの涙をこめて、

私は高らかに笑つた。

おお、哄笑、

その叫びがどこからかまた、

遠く歸つて来る。

海の彼方からこの夜のさみしい風に送られて、

山の彼方からこの夜のさみしい心をふるはして。

おお、哄笑、

其時、人類も高らかに心の底に笑つた、

自棄の、

夢の、

悲哀の、

人間の哄笑、

見ろ、

この夜の街頭を、

人間は来る、

人間は行く、

彼らはふしぎさうに私の顔を見た、

次に急に彼らも笑つた、

さうだ、心の底に、

ああ、何といふさみしい彼らの哄笑だ、

彼らは聲に出し得ないでいたましく笑ふ、

地の底から来る様に、

め入つた、め入つた哄笑。

見ろ、

永遠から永遠へ行く街頭に、

あの貧しい哄笑、

あの無智の哄笑、

胸の底に涙を押し込める哄笑、

もうほんとに耐へられぬ。

星も見えぬ、

心も暗い、

風もさみしい、

人間はましてさみしい、

ああ、耐へられるか。

私は杯を手にして、

「ウイステク」と主婦の訛つて呼ぶ酒を、

心の中に注いだ、

心の中に——やつぱり悲しみの根に寂寥の水を。

ふらふらと、

暗い街頭をまはればなほ耐まらぬ、

一つ高く笑へ、

もう一つ。

世界のどこからか答へる哄笑と共に、
酒を求めて、

ああ、杯の中に寂寥の水、

心の底の嘆きをうつつして呑む。

ああ、

街頭に蹠踏たる人間の哄笑、

どこから来た、どこから来た、

この人類の姿、

さみしい哄笑、哄笑よ。

大空の歌

夕暮の、

うす碧みどりの大空、

眼も遙かな希望の大空、

ああ、かぎられたる地上から永遠の大空を望む。

沈んで行く色、

沈めば沈むほど深くなる色、

あの大空の深さの中に、

何が寂しく棲んでゐるのか。

遠い、

たしかに遠く遙かだ、

そしてしかもすぐそこに私の心が大空、

湛へられた深さの寂寥の大空。

昨夕、

私は思はずむつとした、

光つた双物があつたら、

恐らく彼女を刺しただらう、

そしてやけな酒、

大いに呑んだ、よろよろとよろけるまで。

ああ、

昨夕ゆふべの私の胸には絶望があつた。

血が赤く流れた、

(恐ろしいことだ、

ああ、光つた刃物があつたら。(

それからあの夢、

(世界中が血だらけになつて、

人間がみんな血だらけで、

いっぱい血が流れて、

私もその中をすんすんと流れて。)

(それはほんとだ、たしかだ、)

私は夢の中でさう断定した、

眼がさめて暗い中に、

血がべつとりとからだを流した、

ああ、あれは冷たい汗であつたのか、

世界を流れる血であつたのか。

朝から一日、

その赤い赤い血が心の腫おにうつり、

(殺さうとした、殺さうとした、)

と心がさはいだ、

さうだ、唯あふのけばよかつたのだ、

そしてちつと大空を眺めれば。

いま私は大空を見る、

いま私の心にも夕暮が沈んで来る、

深い寂寥、

深い沈静、

ああ、この耐まらなさは苦しい、

おしつける、おしつける、ああ、心の胸を。

何んといふ碧だ、

希望は遠くに光る。

ああ、星だな、

(一番星みつけた、

二番星みつけた、)

とあの子供の頃が思ひ出される。

あの頃のおつかさん、

さうだ、おとつあんもよかつた、

子供の様にもう一度、

たつた一度でいいのだ、

ちつと抱かれてみたい、

とりすがつて純なわがママを言つて。

ああ、

暮れはてて来る、

心も暮れはてて来る、

どの星を心の影にみつけやう、

すつかり暗い心の空。

荒んだ血が、

しづかな魂の嘆きにかはる、

暗いけど、さみしいけど、

これがほんとの苦しみか、

悲哀の大空、

寂寥の大空、

ちつと立つてる地上の影を笑つて呉れるな。

別れ行くK子に送る詩篇

星の消えて行く様に、

とけて行かうとするあなたの瞳、

愛の瞳、

愁の瞳。

永い間、

地の胸にひめた愛も、

埋められまゝに、

時は永遠に流れるのだ。

あなたも時の流れに、

私も時の流れに、

自然はさみしい思索を、

人類の永遠に送る、

そして時は来た、さみしい時は来た。

あなたと私は、

音信ばかりで戀を通はし、

いま音信ばかりで別れる、

相見ぬに始まつて相見ぬに終る、

地にさみしい愛の影。

いま深い戀に、

私は苦しい全世界の女性を、

心の中に見て、

一人の少女に見て、

私も行く路に、
時の流れに立つ。

私も行く、

あなたも行く、

時の影、愛の影、

消え行く悲哀の人生、

とけて行く永遠の人生。

ならねばならぬ中に、

いまさみしく遠ざかるあなたの影、

二人はさみしかつた、

しかし純であつた。

戀にうちかつて愛の時の流れ、

さみしい影の永遠の光輝——。

別　ること、

どんな苦惱を見ようとも、

私は求める、自らの愛の深い少女、

その少女こそ、

あなたの全體を卓めてゐる世界の女性、

とけて來た愛のあなた——。

K子よ、

わが少女K子のために、

愛の瞳の、かすかにとけて、

わが胸の大地に、

青き麥ふみしめつつうたへ、

素朴に胸うちてうたへ、

ああ、別れ行く愛のさみしき影よ。

靈魂悲調

空に渦巻く雲の、

灰色に曇り、

心も灰色に曇り、

なやましき世界苦の人間、

靈魂は悲調をかなでながら、

心の底のドラムをうつ。

見よ、

曇れる空からは雨の様な霧、

さみしく、さみしく、人間の心に降り、

ぬれながら心の空に立つ春の樹木、

ぬれながら苦しみの地に生えた春の草葉、
緑りの芽にさみしく降る。

見よ、

朝、日は照らず、

朝、若葉は輝かず、

散る花の蔭を行きて、

苦惱の蔭を行きて、

曇れる空に碧の輝やきを思ふ、

ああ、深き靈魂の悲調の中に。

ああ、

心の底をうてよ、

心の底のドラムをうてよ、

遠く遙に曇れる空を越えて、

わがドラムは鳴り、
 あらゆる人類の行進曲は鳴り、
 人間はさみしく連く、
 永遠のタイムの蔭に。

草も、

樹も、

土も、

この心にうたひながら、
 愛の基調に鳴り合はして、
 なやみの蔭にうたふ。

かくて、

人間は行く、この蔭、

人間は行く、曇れる蔭、

人間は行く、永遠の蔭、

うなだれながら、考へながら、

苦惱の中に、苦しき愛の微笑を洩らしながら。

ああ、

かぎりなき永遠に、

長く人類のつづく行進曲、

世界も血にうたひ、

世界も苦惱にうたひ、

人間は行く、曇つた空の蔭。

ああ、

うてよ、

うてよ、

高く悲しくうてよ、

靈魂の悲調、

悲哀の蔭にわがドラムをうてよ。

敗れたる者の歌

(T子に送る詩篇)

戀は悲哀、

遠いさみしい空から、

雨よ、何を思ひながら降つて呉れる、

ああ、敗れたる者に。

昨夜、

心もとなくさみしく、

戀は空虚な影を残して、

空にとび去つてしまつたのか、

やさしい心に、ふつて呉れる雨。

愛しあひ、

かぎりなく愛しあひ、

その愛することが悪いのか、

ああ、愛するが故に、

この世界の結婚はなりたたぬのか。

なぜかと、

ちつと世界の心にきいてみよ、

愛するが故に、

われらが相愛するが故に、

虐けられ、拒けられる理由を。

愛する者、

愛せらるる者、

こゝ世外のかぎり求められぬ者を、

失へといふ、

ああ、失へといふ。

いつも、

結婚は成り立つのだ、

しかも、愛は失はれねばならぬといふのだ、

愛がなくて、

この世界はどうなる。

見よ、

この世界の血のうめき、

苦しみ、

喘ぎ、

愛の求められぬ悲痛になやみながら、

世界は空虚の影を落すのではないか。

ああ、

その愛がわるいのか、

苦しく求める愛がわるいのか、

ああ、棄てよ、

ああ、棄てよ、

凡ての求めることを。

見よ、

空から降る雨の、

春は生きた草葉にふりそよぎ、

ここに充てらるべき愛の、

心のさみしく降れど、

地は砂漠、

人間は荒涼、

愛はいつもかぎりなく奪はれ、

世界の愛は行くところなく果てる。

いま、

わが愛の、

行くところなく果て、

ああ、行くところなく果て、

敗れたる者の一人。

彼方、

砂漠の影に、

消え行く彼女の愛も、

果てなく消え。

求めながら、

さすらひながら、

地にさみしき影を追ひながら、
果て知らぬ夕べの暗に、
行衛は遠く、遠く、ああ、彼女の戀の影も消えながら。

二つの魂の、

失はれ行く悲哀、

されど、とけて逝く悲哀の、

遙かの空から、

雨はさみしく降るのだ。

ぬれながら、

しかも心は渴く愛の泉の、

求められぬ二つの魂、

行くか、ああ、もう行くか、

ああ、消えて行くか、

悲哀の影。

ああ、

これがまたさみしい人間の、

生まれたままの運命、

空から降るのは雨か、

心に降るのは涙か、

泣かないでいい、遠く遙に行け。

ああ、遠く遙に

心の底に深く深く、

とけて来るのか、

消えて行くのか、

遙かの樹の影によつて、

互にさみしく物思ふのか。

ああ、

時と苦艱が来たのだ、

そして砂漠は風だ、

ああ、心を強く行つて呉れよ、

われは敗れた胸を抱きしめて、

さみしき暗き影を踏みながら、

再び孤獨の路を追ふて行くのだ。

孤獨の歌

心の砂漠を掘れど、

泉は湧かぬ、

ざくざくといつも砂

焼けた石。

ああわが心の砂漠を掘れど

泉は湧かぬ。

夜ふけの空に、

星が、

地は寂として沈黙、
大きな沈黙。

立つて、

君の室の窓を、

友よ、君の眠る室の窓を、

心はしづかにたたく、

私は眠られないで君にまた苦しむことを求めるのか。

今宵、

君と共に語つて、

人々の、また君の、

悲しくも心を難じたが、

そしていたく君を苦しめたが、

ああ、それは君を苦しめたのか、

また私を苦しめたのか、

ああ、また私を苦しめたのか。

私は曠野の一人

私は砂漠の農夫、

掘れども掘れども苦しみの砂を掘るばかり、

艱^シみの石を掘るばかり、

愛よ、

泉よ、

ああ、私は喘ぐのだ。

私は心の曠野の一人、

私は心の砂漠の旅人、

追ふて来る夜の不安に悩むで、

行手を急ぐけど、

あてのない地上の旅、
ああ、私は一人の砂漠の民。

私は一人の砂漠の民、
孤獨の民、
遠くさみしく、
わが歌はいつこにひびく、
ああ、わが歌の心の――。

砂漠の中で、
路を求めて私は歌ふ。
心の砂漠の中で何と惱ましく歌ふぞ、
ああ、わが孤獨の歌。

自らの魂の

行きがたない悩みをば、
いづこにさすらふか風に吹かれて、
夜は夜に、
晝は晝に、
ああ、苦しく歌、
ああ、さみしく歌。
日が出で日が沈み、
星が出で星が消え、
時には月の影に、
砂を卷く風吹く日も、
さみしき黒き夜の暗にも、
絶えざる苦しみの歌、
ああ、求める愛の苦しみの歌。

世界の悲痛を身一つに、
われらの苦惱を身一つに、
私は歌ふ、
私は叫ぶ、
砂に消えて行く孤獨の歌。

苦しく求めて一人、
苦しく愛を求めて一人、
世界の影に、
私は一人の影を投じて歌ふ
砂漠の泉の、
世界の愛の、
さすらひの求めの歌。

友よ、

許して呉れ、
今宵君の窓の下に立つて、
星ふる地上に一人、
私は孤獨で歌ふ、
私は孤獨で行く。

私は涙しながらも、
大地を踏みしめて、
わが孤獨の路を行く、
世界のさみしい路を行く。
心をもて人々の心の扉をうち、
自ら苦しく歌ひながら。

ああ、永遠に、
ああ、悠久に、

地上は苦しい愛、
湧かぬ愛の泉、
しかも求め求めて行く私の歌、
一人で、
たつた一人で、
うたひながらきいてる私自らのさみしい愛の歌。

わしが行く路や心の砂漠、
草も芽もない風吹く砂漠、
いづこさすやらあてもなし。

広い砂漠をとほとほ行けど、
いつも風吹き熱砂がとんで、
黒い暗夜が追ふて来る。

苦惱の歌

その夜家を黙って出で、耐えられぬ苦しさときみしさを抱きながら、一人夜を突いて汽車にのり、寂寥と苦惱の中でうたつた詩篇——これをT子に送る。

寂寥の夜、
大地の胸をわけて、
風のように走る列車、
暗がつつむ空の、
どよめき合ふ苦惱の人間の響。

暗い窓を透かして、
自然はちつと暗の眼を据えて、
苦惱をみはる、
私の心も苦惱の底に、
彼女のなやましい胸をわけて、

ちつと響の中になやみながら。

赤いシグナルが、

ちらと覗く、

もうさみしく消える、

ああ、心に消える、惱ましい愛の影、

私は愛の影を追ふて、

遠くさみしく走る。

地を走る苦惱、

苦惱の中心の、なやみの影、

おお、それよ、彼女の影、

私はいづこに彼女を求めろのだ、

ああ、耐えられない愛の幻影を。

ああ、

今宵、

私はこの心のなやみに耐えかねて、

苦惱を造つて苦惱の路を行き、

空しい愛の破産、

世界の愛の破産の路を、

狂ほしくさみしく追ふ、

ああ、狂ほしくさみしく——

いづこに、

遠く追ふとも、

求められぬ愛の、

世界の冷酷な女性、

碎けた胸の底に、

暗をついて走る列車、

いま、どこかで赤い列車の火の消えて行くのを、
 苦惱の人間のさみしくも進み行くのを、
 ああ、彼女もちつと見てゐるのか。

暗い野の、

愛のステーションに、

旅客の群は待ち、

夜の底に燃ゆる愛は待ち、

さみしげに待ちつづける。

ゆるゆると苦惱にどよみ、

長々と頽廢に燃えながら、

いまとどまる列車、

おお、その時ふと私の心の底に、

苦惱と愛の旅客の、

覗いてる瞳——おお、彼女のさみしい瞳。

だが——

あられもない燃ゆる愛、

求める顔はあられもない世界の旅人の、

見も知らぬ女性、

私が見すほらしい心の底に、

ふと見えた幻影。

思ふ、遠い海の底に、

暗い夜になやむ人魚、

彼女はいま夜の底に、

さみしく讀書をつづけてゐるか、

私の人知れぬ苦惱の影に、

ほほえみながら、涙しながら。

ああ、遠く行け、
 ああ、遙に行け、
 わがさみしい苦惱、
 苦惱の底に愛は燃え、愛は燃え、
 汽車は暗をついて、
 わが苦惱の中に走る、
 ああ、どよめき合ふ苦惱の人間の響。

後の扉

なやめよ、
 深きあらしの地の影に。
 なやめよ、なやめよ、
 愛すべく、深く、永遠に、
 求める路上のあらしの影。

人間の歌

太陽の歌

太陽、

光りの宇宙。

光りの中に漂ふ世界、

光りの中に漂ふ人間、

さみしくとも輝け、

苦しくとも輝け。

朝、

81 大地のめざめ、

人間のめざめ、

遙に遠く世界をめぐる太陽、

そは苦惱と寂寥のふしどに、

頽廢を抱いて眠る人間、

その心の錆びたる扉を訪れる。

昏々として濁つた肉、

叢つてる鬱憂の魂、

疲れ切つた肉の魂が、

しみ込んで來る悲哀に耐へかねて、

夜の暗の底に嘆いたが、

いま遙にさみしい太陽は來た。

朝の心にさみしい太陽は來た。

見よ、

曇つた空、

曇つた生、

空の底に深く、

光は雲をつつみ、

しづかに森の梢から、

大地の胸に下つて來る。

樹々はいま、

萌えそめた眼をひらき、

しめやかな雨にぬれながら、

つめたくその光をなめ、

さむき光の心にぬれながら、

人間の愛の心に、

強い永遠の意志を持つて來る。

遠く世界の太初から、
 あらゆる人間の實在は生に拓けて、
 森の様に黒々と夜も、
 霜の様にさむざむと冬も、
 草葉の様に縁深く夏も、
 いつも遠くその生命の一路を進んだ、
 そして遙かの永遠に。

太陽はその時、

曇つた心に更に廣く、
 曇つた愛に更に苦しく、
 曇つた光りに更にさみしく、
 いや更に深く人間の寂寥を訪れるのだ。

しかも晴れた日の輝いた碧りの空の太陽すら、

洗洋たる光輝の海の中に、

一つの大きい影、
 大きいさみしい影、
 さみしい孤獨の影。

その影の其時、

世界の中心に人間をうつす時、
 人間は泣かるるのだ、
 しかも大きな愛に泣かるるのだ、
 見よ、地上の人間の影。

しかも碧りの空の朝を思へ、
 日が出る、赤々とする、
 熱烈な愛に燃え、
 大きな世界の中心に燃え、

あらゆるものをつつまうと出る。

しかも其時太陽は、

その影に暗い夜をとまなうて、

ちつと悲哀を耐へながら、

積極と自由と革新の世界を、

人間に拓いて呉れる。

考へ見よ、

其の朝に祈つてる老夫、

その影の長きはさみしく、

敬虔な心が光りの流れを浴みて、

考へ見よ、

山をのほる樵夫、

海に出る漁夫、

畑に行く農夫、

勤めに出る人々、

輝いた朝の戦ひの心、

私は常にその人達と大きな心に合し、

長いさみしい影に、

生の影を追うて行く、

そして世界の朝の清新な苦惱と努力を知るのだ、

そしてなやみながら敢て、その路を強く行く。

夕べとなれば、

日は沈む山の蔭、

野の蔭、

森の蔭、

あるは心の砂漠の荒涼たる蔭、

暗の不安、
夜の頽廢、

しかも心ある人間はその路をもさみしく強く行く、
ああ、地上に長き人間自らの影。

ああ、けさは曇つた空、
しかもその底に深い太陽の光りの愛を考へながら、
この街道をしめやかにぬれながら、
肥料車の音は連き、
麥に宿る魂の雫も光る。

孤獨よ、

寂寥よ、

人間の魂よ、

太陽と共にさみしく、

太陽と共に輝かしく、
ああ、郊外の朝のぬれたる太陽、
碧りの空を思ふことしきりに——

世界をめぐる、人間の永遠の生、
とけて行く孤獨の實在、
見よ、太陽と人間と私と、
かぎりない抱一につつまれながら、
うたふ、うたふ、さみしく輝かしい太陽の歌。

生の歌

生は

さらさらと流れる

心の小川。

いつか心が大きな海に浮び、
 いつかさみしき船を走らせ、
 いつか沖とほく消えて行く。

月は一つの影、

いつもさみしい一人の、

夜の空に、

遙に西に、

雲にかくれて行く一つ、
 遠くめぐつて行く一つ。

曇つた空の、

すきまに星はのぞき、

星は星として自ら、

月は月として自ら、

宇宙の高き空に、

群れたるもの一人。

かくて空は曇り、

いつも生は曇れども、

大地は月に明るく光る、

生は人間に明るく光る、
深き愛の一つの影に――。

生よ、そは人間の一人の、

流れ行く水のかたち、

小川は集り、

大河は注ぐ――

廣き深き愛の海に。

海を遙に、

水脈の流れ行くもの、

つめたく、さみしく、沖遠く、

やがて消えて、

海それ自らの大きな水に合し、

生は宇宙それ自らのすがたに。

生は一人、

されど大きく愛に集り、

月の輝きわたる夜の空、

さみしき強き一つ、

あらゆる星も一つ。

一人の生は流れ、

一人の影は消えて、

永遠と無限との自由の

またさみしき一人の自由の、

深き空に融ける。

ああ、群れたるものの一人、

さみしき生の影、

苦しき人間の影、

とけて行け、無限の空に、

生きて行け、永遠の空に。

戦鬪曲

血にまみれた世界の手、

血にまみれた永遠の手、

恐しい世界の顔をみよ、

殺人犯の顔、

物質と頽廢の顔。

そしてその顔が哄笑する、

おお、世界は狂氣の哄笑―

人類は聲をあげて狂ふ。

渦巻く擾亂、

渦巻く闘争、

世界の現實の中に、

そのキイは雜然として鳴り出だす、

狂氣——世界の狂氣の手に。

蹠蹠たる人類の歩調おしりに合して、

蹠蹠たる曲、

轟々たる機械輪轉の曲、

雜音と雜音と物質の中に錯綜する曲

しかも世界の戦闘曲。

混亂、

紛叫、

血のうめき、

肉の相打つ舞踊、

血にまみれた手はキイをかきまぜ、

踊る手は互につかみむしり合ふ。

無數に、

歌にわめき、

無數に肉弾を投げ、

蹴り、むしり、互に殺し合ふ。

血に酔つて、

酔どれの世界の街、

ぐつたりと疲れて昏々と眠つて行く魂、

ふみにじり、ふみにじられ、眠つて行く人類、

壊滅の市街に踊る死の舞踊の群。

肉塊は肉塊の上に立ち、

恐しき壯嚴、

恐しき雑音、

どよみどよみ、どよみつつ人類の舞踊、

狂氣の世界の戦闘曲。

死と生の曲

世界のどこも、

恐しき哄笑と共に、

太いベースで狂つてる死の曲。

暗く冷たい手で、

太いマツスの世界の手で、

宙を打つて走る弾奏、

ぐんぐんとのたうつ苦惱の指より迸る響。

生々しい血、

脈うつ苦悶、

腐つて行く肉體の黄昏の、
迂鳴つてる世界。

時は暗く流れ、

空は暗く煙り、

横はつた山の肉の、

どんより沈んで行く黄昏。

重く降つて来る陰鬱の曲、

人間の死の曲、

世界のどこかに殺されて行く悲痛な叫びがきこえる、

おお、うめいてる世界の者。

地の胸をわけて、

世界の心にとけて行け、

太いベースの死の曲から生の永遠に鳴つて行け、

おお、滾々としてつきない死のうめき生のうめき。

世界のどこも、

恐しい哄笑と共に、

太いベースで狂つてる生の曲、

凍つた路

夜更け、

凍つた路の、

さみしい山ぞひを吹く風、

冷かに、心も冷かに。

ちらちらと、

海の彼方に街の火が見えて、

黙つて行く三人に、

崖の下の波の歌、

何をうたふぞ波の歌。

波は遙かの沖の、

風に吹かれて、

夜の底によせ、

心の底によせ、

さみしく強く自然の歌に、

人間の心を生かして呉れる。

私は立ち止まつて、

二人は行きすぎる、

黙つて行く二人、

いつまでも二人は黙つて

この夜の夜をつめたい路を行くのか。

西の空には半月が、

つめたくうすく輝いて、

光の餘波がよせる波にとけ、
わが心の底にとけて、
二人の影もおほろに行く。

ああ、自然のつつむ人生の凍つた路に、
さすらひの路を行く様に、
黙して二人は行き、
波のみいま歌ふ。

遙に海の底の歌の、
地にふれる波の嘆きをきけよ、
ああ、自然の歌の底に、
いつまで人間の凍つたさみしい路はつづくのだ。

ああ、遙に町の光の中に、

わが愛する心のふしど、
路上に苦しく、
人生に苦しく、
人間は愛に求める、
心の光りの宿、
ああ、永遠に光りの宿を。

人間の歌

地にさみしい影、

人間――。

人間はいつもさみしい影を引く、

苦しい影を引く、

心の苦しい影、

魂の苦しい影。

地上に長く、

永遠の人間自らの影、

ああ、人間の影。

地上は人間、

今宵泥濘の路上に、

心の泥濘の路上に、

人間の魂は行き悩む。

空にはかすかの星、

沈黙の中に希望を投げる星、

輝くものへの思慕に人間を誘ふ星、

求められぬ愛の星。

いつも人間それ自らは求められぬ愛の巡禮だ、

求められぬ愛の欣求者だ、

いたましいまでに地上をこめてゐる人間の焔、

熱情の中に永遠に叫んでゐる苦惱、
愛は苦惱の中に。

この夕、

燃えながら曇つた西の空に、

日はかすかに沈んだ、

そしていまいづこに日はめぐる。

燃えながら、

曇れる人間の苦惱、

人間の心の奥の、

いまいづこに愛はめぐる。

ロシアは革命の國、

苦しきいたましき人間それ自らの國、

曇り空の日は、

人間の國にめぐる、

苦しき愛は人間それ自らの苦惱の中に。

さては壓制と暴虐との物質の國、

人間それ自らの亡滅の國、

貪欲と空しき犠牲の國へ、

烈しき流血の文化の國へ、

ああ、いま曇れる日はしづかにめぐる、

愛の日はしづかにめぐる。

空には星——かぎりない愛の星、

めぐる日と星と、

いかに人間の悲痛の歌の、

かぎりない永遠に鳴り合つてゐるか、

いかに互にさみしく微笑み合つてゐるか、

かぎりない苦しき愛の、
かぎりなく人間の中に。

世界に愛、

世界に苦惱、

世界に人間、

求めながらさすらひながら、

彼らはうつむいて、

日と星とを知らないで行く、

われ自らの愛の力を、

たえ間なく物質に喘ぎ、

魂の日と星のかかるも知らずに、

かくて人間は、

果てしなく生れ、

果てしなく死に、

果てしなく苦しく、

いつもさみしく地上の宿に。

暗い地面、

泥濘の路、

空に星がうすく笑ふ、

悲しく笑ふ、

人間はうつむいて行く。

見よ、

この夜をかへる労働者、

二人はましてさみしい女の労働者、

恥ぢらひながら、

しかも世にすねた顔、

自ら自らをあざける世界の人間の顔、
自らすてたるものの寂しさよ。

夜を、

いまその誰かうたへば、

あらゆる人間の心がうたふ、

悲哀、悲痛、惨虐、いつも人間は涙しながら。

見よ、

そこにはまた色白きみめよき彼女、

日より日に、さみしく漁らるる肉體、

ああ、彼女が歡喜か、

遂にかくて人間それ自らの悲痛。

あらゆる人間、

生活の中に誰も苦しくさみしく、

パンのために一日を、

また更にパンのために一日を、

人間はすぎて行く。

見よ、

歟ふる農夫、

槌ふる労働者、

店舗の中の青ざめた主人、

竈の前のやせたる妻。

廢類は、

富める家すら見舞ふ、

そしてその父の食欲にみちた顔にさへ、

人間それ自ら苦惱がきざまれてる。

ああ、

あらゆる人間、

あらゆる人間の苦惱、

物質の國に、泥濘を、

ああ、心の泥濘を、

世界の人間は行き悩む。

愛なき世界の民衆、

魂の滅び行く世界の人間、

この夜を領する世界に、

ああ、人間はこれで行くのか。

今宵、

私はこの窓に坐つて、

さみしくこの心の歌にうたふ、

溢れて溢れてとめども知らぬ涙、

涙の歌をうたふ、

ああ、かうして世界は行くのか。

ああ、

この涙の歌、

この人間の歌、

しかもこの苦しい人間は、

この世界の中の人間は、

みな自らの魂、

みな自らの愛を待ちこがれて、

その日の希望と歡喜に燃えながら、

鬱憂の中に。

魂は自らの中に、
愛も自らの中に、

ああ、人間はみな自らの中に――

苦しい愛の歡喜、

世界の悲痛の歡喜、

肉體と魂の融合の歡喜を――。

世界は苦しくつて、

人間は苦しくつて、

愛の求められぬ曙を追ふのだ、

永遠に――。

見よ、

涙の中に、

いま人間それ自らの力、

苦しき中に、人間それ自らの歡喜、

信ぜよ、人間の強い歡喜は苦しみの中に来る、

さみしくも強い歡喜が。

永遠の苦惱、

そはまた永遠の歡喜、

信奉と忍従と、

そこに愛は正しく戦ふ、

そして苦しい歡喜に戦ふ。

ああ、地上を踏んで、

ああ、泥濘を踏んで、

苦惱を忍んで行け、

かぎりなき苦惱の中の愛――

魂を抱いて行け。

さみしい苦惱、
 さみしい愛の力、
 さみしい魂の力、
 しかも何といふ人間の歡喜だ、
 ああ、涙しながらほほえめる人間それ自らのわが愛の
 歌の心を知るか、
 夜にうたふ、永遠に正しき人間の歌の心を。

郷土の歌

悲しく地に、

冬の雨ふる日、

私はわが郷土の大地に、

しみ入る心のさみしさをみつめる。

こゝはわが郷土、

こゝはわが生誕の地、

いつも私はこゝに住んで、

いつも私は學校に通ふ。

この土は、

私の離れられない土、

この家は、私の離れられない家、

この街は私の離れられない町、

故郷を出てゐる時にも、

いつも慕しい土地。

私はいま地上のすみかに、

私の郷土の中に、

私のさみしい心を入れてゐる、

しかも私はまだ燃え盡きた心の持主ぢやあない、

私は盡きない私の心を

この土の中で養つてゐる。

この郷土の中に、

私のオシアスがある、

またこの郷土の中に、

私の荒廢もある、

よろこびも、悲しみも、いま凡て郷土の中に。

しかしこの郷土の中に、

私が世界を考へる心、

私が人間を考へる心、

私が民族を考へる心、

わが家を、私自らを考へる心が、

さみしく強く燃え上がる。

遠く沖に、

この郷土から暗の漁火がみとめられる、

其時、私はわが心にさへ火を點すのだ、

人間の心にさへ愛の火を點すのだ。

朝は船出の歌、

夕は歸船の歌、

海に漁夫はその生活に戦ふ。

夜は、

さみしい遊蕩者、

さみしい肉をうる女、

淺ましくしかも眞實に、

人間の持つ狂態もくり返される。

聳ゆる山は、

冬は雪、夏は緑、

秋は紅葉に燃えて、

正義と頼心とを人間に持つて來る。

海は碧、

時には荒れ狂ふ怒濤、

何んといふ人間の運命が、

その中にこめられるのだ。

地上よ、

わが郷土よ、

つきない世界の心が、

わが苦しみの心にある、

郷土さへに、永遠にわが心にある。

愛すべく、

苦しき愛よ、

わが苦しき愛の生活よ、

永遠に苦しきわが愛の郷土よ。

心の鐘

深夜めざまめてきけよ、
心の底にうつ鐘の音、
よきめざまめの鐘、
世界のめざまめの鐘。

われらは常に苦しむ、
われらは常に生に苦しむ、
物質と頽廢とに苦しむ、
自由の郷土に苦しむ。

苦しみながら、

われらの心の鐘はうつ、

良心の鐘はうつ、

苦しみのために苦しみをすてるな、

苦しみのためにいつも愛せよと。

苦しみの中に、

心の鐘のなる時に、

一人の心は他の心になり、

また一人の心は他の心になり、

また一人の心はまた他の心になり、

鐘の音は流れて、

民族に、

世界に、

宇宙に。

かくて宇宙の道は生る、

かくて世界の道ヒュマニテイも生る、

民族の、

人類の、自然の、地上の、

しかも永遠の道ヒュマニテイが――。

その永遠の路上に、

心の鐘は黙して鳴る、

永遠の沈黙、

永遠の鐘。

いま心にめざめてきけよ、

心の鐘の豊に黙して鳴るを、

そは至上の、平凡の、人間それ自らの批判、

しかも永遠の批判。

あいま地上は曇る、
 心の鐘をして地上と共に曇らしめるな、
 黙して人間の心の中に鳴る、
 永遠の愛の音をきけよ。

飢えた子供の泣き聲

世界のどこかで、
 飢えた子供の泣き聲が、
 いつになつたら腹がくちくなるだらうと、
 寒さにふるへながら言つてるやうにきこえる。
 夜の流れ、
 時の流れ、
 私はいま沈黙の底にゐる。

飢えた母が、
 その子のやせたからだを抱きしめて、
 青い頬をよせて、

互にさみしく黙つてゐるだらう、
 母はさぞ心の中で、
 暖いふとんの上で暖いごはんを喰べてる、
 幸福な子供もあるのにと、
 不幸なわが子のために世を怨めしく考へてゐるだらう。

世界のどこから、

この夜の底のどこから、

このさみしい叫び聲は流れて来る、

遠く海を越えてか、

近くこの夜の窓からか、

ああさみしい叫び、

ああさみしい人間の叫び、

夜を通して来る世界のしづかな叫び。

私はいま、

自らの死を考へて、

死の果ての土を考へて、

沈黙の底にふるえてゐる心の鼓動をきいてる、

そしてその鼓動の中に、

さみしい飢えた子供の泣き聲をきくのだ。

ほそほそと力弱く、

ああ私の心をかき亂す哀感、

私の心はさみしく、

私の血は熱して、

世界のどこかの聲を、悲しい聲をきかうとする。

私が十二の年に、

もう死んだ祖母と共に、

そんなわびしい日を送つたことをおぼえてゐる。
その日の悲しさが、
いま私の心で泣いてゐるのか。

去年の正月の三日に、
夫にすてられた母と子の悲しい眼をみた時、
私はもう耐まらなかつた、
その時の心が、
いま私の涙を湧かしめるのか。

私はいま嘆く、
そしてちつと心の底にきいて、
悲しくも涙する、
ああわが心の底に、
世界の飢えた子供の泣き聲が、

ほそほそときこえる。

夜の流れ、
時の流れ、
私はいま世界の中にきいてる、
世界の中に涙してゐる、
誰れもきかないか、このさみしい子供の泣き聲を。

大地の歌

見よ、

打ち連く山脈——大地の起伏、

地は廣く、かぎりなく、

地は遠く、かぎりなく、

地は深く、底深く、

世界をこめてゐる。

大地！

その畑、

麥が青々と芽出してゐる畑、

その小さな畑も、

また愛すべき大地だ、

その黒んだ土の色、

霜にみち、しかも生にみちた土の色、

大地の色、

そこに大きな土の産生がある。

かしこの樹、

あれも大地に立つ、

底深く根を大地にはつと立つ、

大きく強く立つ、

しかも小さな草の葉すら地にしっかりと結びついて、

來べるき春を待つてゐる、

そして根は大地からかぎりなく生を吸ふのだ。

遙にかぎりない海、

この海の底に、この大地は連いて、

一帯の海底——

そこに海草は搖ぎ、

魚が地上の如く踊る、

果てしなき深き底では、いつも暗く永久に暗い大地。

打つ波も、

大地の傍にて、

碎ける時、その水底の岩と土と石とに感ずるのだ、

まして晴明の日に、

水を通して緑玉の様な大地の表を海底に望む時、

かぎりない人間の思慕が大地を戀するのだ。

長い都會生活、

其時一本の麥すら、

一塊の肥えた土すら、

その生活を慰めるのだ、

まして長い海上生活、

一面の鋪石すら大地の力を人間に傳へる。

大地！

踏みしめて見よ、大地！

その底は深く世界の中心に、

高熱の世界の感情をこめるのだ、

踏みしめて見よ、

大地の底まで——

煙を噴く山、

草と樹と密林の山、

大地の肉體は、

底にかくれた生をそこにあらはす、
黄昏など、

ちつとみつめて見よ、

山は生きて動いてゐるのではないか、

其の下に血が脈うつてゐるではないか。

千古ふり止まぬ雪の高峰、

深く暗い海底——

思ふだにさみしい魂の孤獨、

永遠に大地は苦しく、

永遠に人間も苦しいのだ。

天と地の悠久、

大地に立つ人間、

大地を掘る人間、

遂に大地のふところに永遠に抱かれる人間。

大地！

自分はいま感ずる、

盡きないわれ自らの土の産生を、

あゝ、いつまでも、苦しくさみしく——

土と人間と、

烈しい人間の思慕と、

さみしい人間の生活と、

強き大地の力と、

かぎりない人類の生きた跡、

大地。

世界の魂

見果てぬ國

—

行けよ、

廣い世界に。

世界は行くだけの廣さだ、

人々が行くだけ世界は廣さを見せる。

かぎりなく世界に、

行けよ、

行けよ。

かの空をながめ、
この地にしっかりと立つ。

かの空より、

この地に、

擴がり充ちた世界の愛、
かぎりない世界の愛。

生きる物は生きよ、

在るものは在れよ、

——滅び行くものは實在の愛に

ああ、

自由だ、

永遠だ、

無限だ、

地に立ちて空を眺めよ、

心は地に立ちてかぎりなき空の果てに。

三

行く力、

苦しく行く力、

ああ、かぎりなき廣さを探る力、

魂の力だ。

弱き者よ、人間、

されども人間の魂は深さと廣さの無限だ、

さあ、行く力はいづこまでも。

立てよ、

行けよ、

世界の主、

世界は愛で民衆のものだ。

さあ、

立てよ、

行けよ、

見果てぬ國をどこまでも。

心の求める國

—

語り更かして夜を、

心の國を求めてかへる、

さみしく滄浪としてかへる。

自分の魂は、

なぜかうも汚れてゐるのだ、

ああ、

空には星、

地には風、

天と地とが苦艱を送る、
とこしへに愛の渴望を送る。

二

いま、

この街をきこえるのは、

うたひさはぐドンヂュアンの群、

かしこに、ここに——さみしい狂態だ。

しかも、

いま自分だつて、

やつぱり頽廢を行くのだ、

苦惱を行くのだ、

混沌を行くのだ。

ああ、

自分だつてさみしい狂態だ。

三

黙つて、

うつむいて行く、

かうしてかへるのだが、心の國はいづこにある。

あのやせ犬だつて、

ねぐらを持つてゐるのだらう。

しかも、わが心のねぐらはいづこにある、

人々も大抵ねてしまった、

しかし、どこにねてゐるのだ、

ああ、物質と頽廢の夢のねどこに、

かれらの疲れた魂は眠つてゐる。

さみしい。

ああ、じつに、

何といふ心の求めだ。

一軒、一軒の扉を、

心はしつかりとたたいて行く、

あけよ、胞を、

世界の頽廢の胸を。

自らの求めと鐘の音

—

民衆よ、

精神をはだかにして、大地の上にさらせ、

世界の中にさらせ、

自我の底にさらせ。

君は何を考へてる、

さあ、このすはだかな、

世界自らの人生をみないか、

世界は、自我で君自らの求めだ。

鐘の音がなる、

ああ、何をいふぞ、

夕の鐘の音、

幾多の虐けられたる時と、

幾多の誤られたる物質の幾世紀とを、

いま君に知らせる鐘の音、

民衆よ、いま君自らの心の鐘。

物質の皮はぬがれる。

精神の自由は君の力を大きくする、

君は立ち上る。

大正六年の秋、

私はさみしい廿五の秋、

私にとって大切な秋だ、

しかも民衆よ、君らのためにも。

そしていまこそ、

世界が眞の自由を、

眞の革命を、

叫び出だす時だ——

そして鐘の音はそれを知らせる。

解放の國

一

さあ、俺だ、

自分だ。

どうしたつて自分だ、

自分が凡ての事だ、

まあ、この自由なことは。

二

自分が生れて来たことは最も重要だ、

自分の足が地を踏みしめることも。

どうだ、

このしつかりとした足、

さあ、もう一度踏みしめてみる、

大地はづつしりとしてる。

三

自分は民衆だ、

しかも自分一人だ。

みたまへ、

澤山の人達が来る、

だが——あれはみんな自分だ、

心の自分だ、

苦しみの自分だ、

みんな自分なのだ——心のはりさける程自分はいつばいだ。

四

草の葉をみる、

秋をやゝ黒く生きてる草。

風もないのに自分が慄へる、

それ、草の葉がふるへる、

自分の全體が草の葉だ。

五

森だつて黒い、

それは苦しみの蔭だ。

自分は恐れる、

それは自分だ、

自分はやつぱり苦しく恐しい森だ、
みたまへ、森は心の奥にある。

六

すつばだかで、

世界のまん中に立つ自分だ。

一人だ、

自分きりだ、

苦しみ悶え且つ歡喜する自分きりだ、

あゝ、尊い自分きりだ。

七

世界は精神で一人に生きる。

自分はいま自分だ、
わが自我だ、
凡ての民衆の抱含だ、
解放の國の民衆なのだ。

黎明詩篇

—

黎明！

まだ暗い空に星がいつばいだ、
星は人間の眠る間も夜を通じて輝いてる。

世界は、
いつでも何物かに生きてる。

—

みたまへ、
ほつと明るい東の空！

しかも弦月が明るみの上の雲の中から覗いてゐる。

弦明は豫言だ、

やがてうすれて行かうとも強い使命のためにだ、

あゝ、曙が来るのだ。

三

明るくなる、明るくなる、

世界が拓けて来る、

自然の愛が人生を醒まして来る。

力強き生よ、

輝き苦しめ、まはだかに照らし出ださるべき力強き生よ。

四

もう朝！

出て行く舟、

呼びかはす漁夫。

凡てこれからだ、

日は雲間に輝き上る。

秋の豫言

一

秋だ、
空の紺青、
海の碧。

みたまへ、
空を高く日はめぐる、
地には陸稻おひざを刈る農夫。

二

秋は雄健な男だ、

しかも愛の女性の強くみのる時だ。

あゝ、胸をうて、

強くうて——世界の意氣をみなぎらせ。

三

いまだうだ、
立たねばならない、
この秋。

世界のために、
愛のために、
民衆のために、
あゝ、民衆自らが立たねばならない。

さあ、この秋だ。

四

人々をめぐる秋、

夜は夜とて月の秋、

雨は雨とてぬれながらの秋、

嵐は改革の豫言だ。

どうしてこの秋を棄てられようぞ、

さあ立て、

秋だ。

生誕の國

一

人生はたまらなく秋だ、

葉の落ちてふるへる秋、

裸かの木が黙つて立つてる秋。

曇つた日など、

北風がさみしく吹きはじめ、

ピユーツ、ピユーツ、

あゝ、何といふ心の蕭條さだ。

二

自分の胸は、

そんな日に、

人知れぬ故郷を求める。

あゝ、

愛の果て知らぬ行手はいづこだ。

三

さすらひ人よ、

——私は昨日野で逢つた、

——今日も街で逢つた。

苦しめるさすらひ人よ、

私はちつと人生を見送る。

四

其時涙だ、

荒廢した世界を考へる涙、

しかし私はちつと堪える、

愛は苦しさを堪えることを教へるからだ、

愛は苦しさに進み行く力だからだ。

さすらひ人は、

わが魂の中のいたましい旅人だ。

五

蕭條として秋、

さすらひの秋、

けれども秋はみのり時だ。

野にもいつばい、
 山にもいつばい、
 苦しくつてい、
 苦しくつてい、
 秋は生誕の國だから。

—
 あらしの詩篇

ざつと耳をすませ、

あらしの聲だ、苦しみのコーラスだ、
 自然の使命づけられた大音楽だ。

地も鳴る、

樹も鳴る、

草も鳴る、

凡て鳴る、鳴る、鳴るのだ、
 世界も苦しくつて鳴るのだ。

二

あらしは、
苦しみで愛だ。

あらしは人間の心を洗ふために来る、
破壊に似た建設のために来る、
悪がこの時醒めるのだ。

三

ほら、
ちつと沈んだ夜の底に、
ふつとあらしが黙る。

嘆きだ、

恐しい嘆きだ、
惨禍を胎む一瞬の嘆きだ、
世界のために、あらしは泣きながらかけまはるのだ、
ほら、また息をこらして来る。

四

朝、
あらしのあとは風だ、
世異へ愛の回顧だ。

晴れた空を、
あらしは『さようなら、さようなら、』
ああ、悲しい別離だ。

五

自然！

人間！

いづれも尊いものだ。

烈しい惨禍のあとに、

人間はまた働き出すのだ、

まあ何といふ苦しい愛の戦ひだ。

六

十六夜だ、

あらしのあとの夜の海――

澄みわたつた月が輝く。

ゆきたまへ、

あそこの海岸で人々が溺れて死んだ、

あそこではいまもう飢えきつてる人々が泣くのだ、

あらしはそこで人生を吹くのだ。

みたまへ、

月もいま輝くことの苦しさを、

自然のはだかで立つ苦しさを。

ああ　そこで、

凡てが、もう凡てが一つなのだ、

あらしも月も人間も世界で一つなのだ、

世界は愛のために苦しく一つなのだ。

世界の底に

一

世界よ、

底の底に何がある、

君の實在の底に。

私はいま路を行く、

君は恒久の遠くにある、

私はいま路を行く、心は君の魂にふれる。

二

大地を踏みしめる、

ムキダシなしめつた大地の上に、
すつきり立つた自分だ。

どうだ、

私は世界に生きてるものだ。

三

曇つてゐる空から、

雨が落ちて来る、

ぬれる、少しづつぬれる、

そこで避けやうとして急いだ。

ふつて来る、ふつて来る、

すつかりぬれちやつた、

そこで私はゆつくり歩いた、

心は世界の苦しみにぬれることを恐れないで行くのだ。

四

私は一人だ、
だから世界だ、
宇宙の底の一つの影だ。

五

黙つて坐つてる、
いつまでも沈黙の領分だ、
心はいくら叫んでも沈黙の領分だ。

世界は一人に知らせる、
黙つてきけ……雨の黄昏だ。

六

世界の底に、
あらしが吹きまはる、
きいてるろ——ほらほら。

これは世界と私との秘密だ、
みんな知つてゐて氣の付かない秘密だ、
世界の底にあらし……。

民衆の國

一

夜を、

友よ、外に出よう。

やがて月が輝くだらう。

月こそは世界の人々を君に教へる。

さうだ——民衆を。

二

半かけらの月だ、

いま街の屋根に大きく昇るのは——、

みろ、頭骸骨くわいこつの様な月を。

あれは東から来た、

そしていま西へ行くのだ——おお、革命のロシアから

幾多の人々が戦つてゐる國へ、

ああ、死シの月だ、

友よ、君は月の心を知つてるか。

三

濱に出て見る、

海が光つてる——月が高く昇る。

漁夫りしが網あみを引いてる、

ほら、あの掛聲こそ民衆の歌だ、

うたはねばならない生活そのものの歌だ。

きいてるたまへ、

月の輝きをみながら君の心が月と星と民衆とを融和する
強いメロデーに合するまで。

四

沖の光、

月の輝く下にも漁火がある、

さうだ——海の中にも民衆の精神が。

あそこでは働いてる、

あそこでは自然と人間とのたえない戦がたたかはれる、

さう、自然と人生との苦しみと苦しみとの深い交霊が

行はれる。

自然と人間とたたかふことは、

それが最も仲よくすることだ、

考へてみる、自然と戦ふ人々こそ最も深く自然を

知つてゐるではないか。

五

月の光に吹かれながら、

堤の上に昇る——松の樹だつて、

月と共に愛だ。

月は凡てに、

月は凡てに輝く——月を背に負ふて歸る私達さへ、

月の愛はのがれられない。

愛は凡てと共にあるのだ、

愛で、世界は民衆の國だ。

愛

一

苦しくつてたまらなくつて、

——しかも愛だ、

恐しくつてたまらなくつて、しかも愛だ。

二

愛は自由だ、

だから愛は苦しい、

だから愛は恐しい、

苦しいことも恐ろしいことも醜いことも愛とおんなじだ。

三

愛は凡てを求めろしかし凡てを滅す、
 凡てを滅して凡てに生きやうとする、愛が生きやうとする、
 だから愛ほど切實で苦しいものはない。

四

愛がなければ苦しい、
 あつても苦しい、
 ——だが愛の苦しみは果てなく求める國だ、
 最高までのほれる公道だ。

五

愛では世界を知る——世界の苦しみに生きてる、
 孤獨で凡てに生きやうとする。

六

苦しうつてたまらなくつて、
 ——しかも愛だ、
 愛は凡てを解決するんぢやない、
 あくまでも求めるのだ。

霧の底に

一

朝、

山から吹いて来る霧、

農夫は深い夢の中から浮いて、

深い夢の中に消えて行つたが。――

それはもう山上に、

力の限り鎌をふつてるだらう、

霧にかくれて見えぬ地面に、

ああ、われらのいそしみはなされるのだ。

二

其時また、

霧の中を、

ちんちやきんちんちやきんと、

石工の石を切る音が、

わたつて来る。

鐵と石と、

その苦しさにふれあつて、

鳴るのか、

嘆くのか、

何を世界に訴へるのだ。

三

もつと心をとさせ、

深い深い霧よ、

かくれた胸の底の人間の感動、

かくれた霧の中の世界の魂。

ああ、

霧の底に、

大きくさめてゐる世界の魂。

四

生は深い、

姿は霧にかくれて見えぬ、

しかも農夫は耕し、石工は切る、

ああ、常に絶えない深さの底に、

いつも魂は動いてゐる。

見えざる手、

見えざる力、

信じあたふか、

わがいそしみなる眞の人生を。

五

心をうつ、

見えざる底の、

人間の影。

光が来て、

晴れ行く霧の底に、

汗にまみれた苦しい姿が、

あらはれるまで。

ああ、

霧はふる、

胸の底に世界の魂が、

その苦しい力にさめてゐる。

世界の夕

誰が逝つた、

誰が働いてる、

どこに殖えた、

ああ、廣いこの世界の野原。

空も青い、

地も青い、

風も吹く、

樹も揺る。

煙つて来る、

煙つて来る、
この世界の夕。

世界の魂

—

行かう、野に、世界に、
かうして日が暮れる、
かうして世界の苦しみがやつて来る。
どこまでも、
友よ、決してへたばりつこなした、
風は吹く、樹は揺れる、
だが、星の輝いてゐる空。

行かう、野に、

世界の魂の果てに。

二

何故悲しい、

何故辛い、

世界は深い奥底に苦しみを呉れた、
感謝しろ、この苦しみに、

そしてわれは耐え得ることを知る、
いつまでもかく悶えながら。

三

貧しい心だ、

貧しい魂の輝きだ、

世界よ、

この私の心をうけとつて呉れるか、

私はいま裸體はだかで祈る。

何の間隙なしに世界に面して祈る。

世界よ、

日本よ、

労働の魂を忘れるな、

どこまでも自然の土と人間に宿る魂を二つとしてみるな、

凡ては魂そのもので働く、

ひざまづいて土に祈れ。

四

眞實が来る、

君の胸の良心が、

そしてあらゆる世界の魂が。

世界は一つの融和に生きる、
それは行き着かない絶對だ、
苦しみ行く路の末だ、
虚無よりか遙かに彼方だ、
混沌よりか遙か混沌だ。

君は悶えてゐる融和の精神を知るか、
一つに充實せんとする努力を、
あゝ、淋しいしかも幸福なこの努力を。

五

月の輝く野を、
ひとりさまよふ自分だ、
祭の夜から森の蔭の深い沈黙を求めた自分だ、
そして深い感激が来る。

さう、遠く太鼓の音――
自分の影が一つ野に浮いてる、
あゝ、世界の野に自分の影が一つ。

泣け、
いまひとりだ、
しかしいまこそ自分の胸は世界の魂を抱く。

六

病ひだと、
何んだ――この肉體の焦燥が、
世界の惱んでる魂、
わが心はこの黄昏の魂に悩む。

孤獨か、

さう、たつた一人だ、

ガランとした室に、

そして外は——暮れて行く風だ。

あゝ、しかし其時、

わが魂が世界にふれる、

わが涙が民衆にふれる、

この一人、人々よこの一人を。

脈々とした山

—

脈々とした山、

どうだ、あの秋の色は！

生に燃える色は。

みよ、山は肉の膚、

カみちた肉瘤、

黙して立てる巨人の胸は燃ゆる、

ああ、正義に燃ゆる。

—

黙せよ、

山とわれと、

いま何といふ偉大を語る。

力はみち、

愛もみち、

理解して世界のために語る。

民衆のために語る。

三

正義よ、

立て、

立て。

あらゆる大地に、

あらゆる郷土に、

さてはあらゆる人々の胸に、

みいでられたる正義よ。

正義は愛の使命だ、

正義は踏みしめる土だ、

みよ、脈々たる山の魂だ。

四

民衆よ、

君の胸に正義がないといふか、

否な、否な。

もし君が物質でいつばいなら、

君の魂の底に、

正義は静してゐるのだ、
 さあ、その物質の塵埃を、
 排出してしまへ。

君らの心持はなほる、
 そして鬱然たる力だ、
 愛と正義の力だ。

五

ああ、
 凡ていま
 充實して立つ秋だ。

民衆よ、

君らの胸をひらいて——巨人と語る精神、

愛のインスピレーションをうけよ。
 山の魂をうけよ。

六

ああ、愛で、
 そして正義で、
 世界はずつと行ける、
 苦しくつても行ける。

みよ、愛の大地に、
 正義の民衆はみちて来る、
 やがてどうだ。
 世界はこの精神に充實する。

ああ、

いまこそ世界の胸は、
愛と正義に燃え上る。

自然の鍵

—

こゝに一つ、

君のために、

真に美しい捧げ物がある。

人々よ、

それは自然の持つてゐる美しい魂だ、

人間の持つてゐる美しい魂だ、

美はいづこにもある、真の美は。

人々よ、

とれ——魂の理解を、
拒否したまふな、凡てにみちみちた魂を、
其時、眞の美が君の心に廻る、
遂に君は永遠に生きる。

二

美だ、
愛だ、

この理解をとらずして、
君は自らの本質に生き得ない。

さあ、とれ、
おちけないで、
そこに捧けられたものが君を待つ、
さあ、君のために、

自然は常に偉大な手をさしのべる。

三

ぶつかつて知るのだ、
そして眞に働けるのだ。

どこまでも止まない、
この自然と人生の思索は、苦しみは。
さあ行かう、
ぶつからう——偉大の鍵を開くのは、
自らの手だ、
この土まみれの手、油の手だ。

さあ苦しいぞ、

しかし行つてぶつかつて解放のためだ、
行かう、行かう。

四

手を握れ、共に、
暗だが——心よい風だ、
どこまでも放しつこなしだ。

自らの自然の鍵で、
互に宇宙をあけろ、
さあ、直ぐにそこに、
凡てがある。

詩集「世界の魂」の終りに

この詩集は私の處女詩集「農民の言葉」以後に出る第一の詩集である。「農民の言葉」を出してから七年、詩の興隆の時代を迎へても私は外の詩集を持たなかつた。さうして漸くいま人々のあつてついでに再び自分の詩集を出すことになつた。

この詩集「世界の魂」は實を言へば私の詩集としての第三番目にあたるものであつて、ほんとうならば「種播く者」一巻を先に出したかつた。嘗て私が出す筈であつた民衆詩篇と題する詩集の中の前半が「種播く者」であり、後半がこの「世界の魂」である、しかし都合によつてこの詩集が先に出ることになつた。第二詩集としての「種播く者」も二月頃までには版に上る筈になつてゐる。

私位詩集の出版に手こずつた者はなかつた。この詩集の原稿にしても殆んど二年の間をある出版社の手に預けられたまゝになつてゐた。さうして外に詩集出版の計畫があつてもいつも破約の災害に逢つたりして、詩集出版のことは思ひ止まらうとばかりに私は氣をくさらしてゐた。しか

しその間にも私は詩作を怠りはしなかつた。私の詩作に對する錯然たる興味と苦惱と、思想充實のために持つ呻吟は長くつゞいて來た。

さうしていま同郷の先輩中里氏の出版計畫の第一步にこの詩集を捧げ得ることを得たのは何といふよろこびであらう。處女詩集「農民の言葉」に持った杞憂は既に失せて、苦悶の中にあつても私は確乎とした自信を持ち、二重にこの詩集出版のよろこびを持つてゐる。恐らく人々の中へ、多くの人々に結ばれる機縁を私にあたへて呉れる人々の中へ、私は第一の言葉をなけるのであるから……。

恐ろしい暗黒の低迷する日本の藝術、思想、文學、詩の上にこの詩集はほんの芽生にすぎないかも知れない。しかし私は讀者と共にそれらを越え行く同舟の民衆としてうたはなくてはならない。それは讀者の誰もが感じてくれるであらう。この詩集一卷の中にはとにかく暗黒時代の曙光がある——その確信を私は持つのである。

この詩集に集めたものは多く長詩篇である。これらの詩の多くは大正七年の作であつて、「科學と文藝」、「民衆」等によつて發表されたものである。さうしてその一つ一つが私の思想と情熱との間に生れた魂の結晶である。人生の思索の上に、戀の斷腸の上に、これらの詩の生まれた日々

があつたのである。

私はいまこの詩集のあらはれることが決して遅くはないと考へてゐる。かうした長詩篇の提唱は最近になつてなされてゐるのであるし、社會人としての詩作もこれから讀まるべきである。これを藝術に考へても現在の日本の文學はあまりに近代思想を忘れすぎてゐる。ましてこの時代の人々の魂に向つて何を囁き、何を暗示するであらうか。

私達は近代人として詩の開拓の路をすゝんで來た。さうしてその路を示す一つはこの詩集でなくて何んであらう。恐らくこの衷情は讀者も入れてくれると思ふのである。

或はまたこの詩集に集めたものが、讀者を深淵の中からうかび上げらせ得るかも知れない。さうした者の一人のためにも私は私のまごころを傾けてその聲をききたい。私自らもこれらの詩によつて日々を勵まし、苦惱に耐えて來た。さうしていままだ暗雲の中にあらうとも心は戦ひの叫びに燃え上るのである。

眞にこれらの詩は戦ひの中から生まれた。自由、憧憬、愛……それらを求めるために、いかに多くの戦ひをこれから經なくてはならないか。

ここに魂と物質との結婚がある。

二つにして一つのもの、凡てにして一つのものその全程を知ることによつて更に新しい路が

開けるであらう。

私は魂のコスモポリタントである……。

私はいま小田原の小さい書齋の中で二つの長い創作に耽けてゐる。一つは長篇小説「未墾地」であり、一つは哲學的長篇「全人」である。この二つは私の一生の仕事として完成しなくてはならないものである。生活のためにそれらの筆を時々止めなくてはならないことは悲しい。しかし私は全力をそれらに傾けてゐるのである。

こゝは自然の地である。波の音が遙にひびいて来る、野に出れば夕日に輝いた山々が見える。その時足柄の山脈は凡て彫像のやうに半面を赤く映し出してゐる。

森のほとりを歩くのもいい。

時として寂しい鳥の聲にそゝられながら丘から野へと逍遙する。荒れた田園から、農夫の生活がひびいて来る。林の中に孤坐して物思ひをするのもいい。

いま郊外の晩秋はふけて夜は月が輝きわたり、いつものやうに木枯が吹く。さうして私は寂しいけれども暖い心につままれてゐる。その感謝を私はこの詩集の讀者に捧げる。さうして大空をとほして心と心とひびき合ふ聲をきく時、私は涙ぐまされるのである。

一九二一年十一月十六日

相州小田原新玉三の小書齋にて

福 田 正 夫

